

◆オナ友

「話の途中なんだけどさ……、おしっこ我慢しながら電マ当てるのほんと気持ちいいね……」

本当に今までの話題とは何の関係もない事を、美奈は吐息混じりに言った。

紅茶も緑茶もウーロン茶も、同じ茶葉から作られるという話題からの急展開。話の腰をバキッと折るのは美奈の得意技かもしれない。

友

ナ

美奈は、中学で知り合って社会人に至る今まで付き合いを続けている親友だ。

私は美奈と同じクラスの時、彼女が授業中に失禁してしまうというアクシデントに遭遇したのだけど、それが故意に我慢していて失敗してしまったという事を聞かされたのだ。

オ

私はそれを聞いて、我慢を趣味にしている人間が身近にいる事を知って、自分も同じ趣味を持っている事を打ち明けたのだった。その時感じた胸のときめきと興奮は今でも鮮明に思い出せる。

ヴヴヴヴ……

振動を弱めた電マの音が、二つ重なって聞こえている。

「ん……きもちいよね。つい癖で我慢してる時に当てちゃう……。漏れそうな時に当てるとちよっとだけ楽になる時があるし……」

私も美奈と同様、股間に電マを当てながらおしっこを我慢している。

私達は今日、たまたま休みが重なったので、街でもぶらつこうか、と約束していたけれど、あいにくの天候だったので、ホテルのフリータイムを利用して、愛用の電マを持ち寄ってゴロゴロする事にしたのだった。

ソファに座ってコンビニで買って持ち込んだお酒を飲みながら、電マを感じる部分に当てつつまったりと世間話なんかして。

我ながらなんとという自堕落な休日の過ごし方だ思っていた。

雑談しながらオナニーをするようになった発端は、おしっこの我慢比で負けたほうが、公開オナニーをして見せるという罰ゲームをしてからだと思う。

通話している時、美奈が妙に上ずった調子で喋っていたり、変な咳払いをしたりするのを聞くようになって、もしかして……と、思っただけで試してみたのだった。もしかして今変なことしてない？と。

美奈は最初はとぼけていたけど、意外とあっさりとは触っていた事を認めたのだった。

私は美奈が何をしているのか？もし自分の考えが当たっていたら……と考えていたから既に十分濡れていたし、友達が電波の向こうでオナニーしているという、アブノーマルなシチュエーシ

ヨンを打ち明けられて、興奮もしていたので、我慢できずに自分も始めてしまったのだ。

特に女同士の友達の場合、こういう事は意外にあるものなのかなど今では思っている。長々と話していると、なんとなく股間に手が伸びてしまう事もあるんじゃないかなと。

むらむらしてしまう周期が一緒になると、そういう話題にもなるし、しちゃおうか？ という流れもあるのではないかな。

飲み会の席で、男友達がレズビアンの女友達と一緒にしてしまったというエピソードも聞いていたし、ゲイでもない男友達が相手の男と、という話も耳にしていたから、通話オナニーにありえない性別の組み合わせなどないのかもしれない。

私と美奈は、通話している時お互い触っているのが普通になっ
てしまっていたし、二人共、相手の声を聞くと条件反射で濡れ
てしまうようになっていた。

決定的だったと思うのは、こたつの中で私がしているのを美奈
に悟られてしまった事だろう。

ずっとこたつの中に右手を入れて触っていたのだけど、美奈が
みかんを用意してくれたのだ。

せっかく用意してくれたものに手を付けないのは悪いと思っ
たし、こたつに入っていると喉が渇く。

いい感じで高まっていた私は、名残惜しかったけど、みかんの
皮を剥くのにこたつの中から右手を出して、両手で取り掛かった

のだが、その時美奈が目ざとく見つけられたのだった。私の指が
不自然に濡れている事を。

それを免罪符にしたつもりだったのか、自分もしたかった、一
人で気持ちよくなってズルいと言つて、美奈も始めてしまい、そ
れが初めての顔を合わせての相互オナニーだった。

ヴー—————……

二台の電マの発する音階が心持ち上がる。

缶チューハイをちびちびと飲みながら、美奈は電マを離そうと
しない。

「ん、珠里やばい……。我慢している時ってなんで飲み物飲むと
出ちやいそうになるんだろうね。飲む時というか、背筋を伸ばす
時というか……」

「わかる。あ……力入らなくなるよね。電マ当ててなかったら出
ちやつてたかも」

美奈の問いかけに、まだ余裕を持って答えられているようだけ
ど、私も結構きている。

「それにしても、……日常会話しながら我慢するのとかオナニー
するのって何かいいよね……。我慢とかオナニーって、普通は非
日常というか、気合入れてやるものというか……私、美奈とこう
いう事できるようになって、嬉しいなって……あっ……思う。レ
ズカップルでもないし、なんていうか、ごくごくありがちな友達

というポジションに収まってくれているのが心地いいの」

「日常に非日常を持ち込んで……んっ……自然に浴け込ませようとする、そういった行為が気持ちいいのかも……あくまでもナチュラルに、生活とのシームレスな我慢やオナニーでも言えはいいのかな？ 発情してるだけ、という意見もあるかもしれないけど、私に言わせれば……違うのよ。他の人はやらないだろうなっって事をしている自分の特異性に酔っている所もあると思う……うまく言えないな」

私は身体を前後に揺すったり、脚を落ち着かなく動かしながら、昂ぶっていく自分を抑えながら話す。

美奈も高まっているのが声のトーンで分かる。

「珠里……の……言いたい事は分かるつもりだよ。要するに私達は『ながらオナニー』とか『ながら我慢』が好きなんじゃないかな……」

「単純に言えばそう……だね、美奈。見せあっている事に興奮するんじゃないくて、あ……あくまでもいつも通りの自分だよってアピールしつつも、二人でオナっっている時間を共有しているのが……好き……あつ……ちびちちやった……」

「私もさつきから……ちびり始めてる……。ずっと当ててると出口が麻痺しちやっって、我慢できてるのかできてないのか……えへへ、分からなくなっちゃうね」

二人共、だんだん正気を保てなくなりつつあるのが分かって、私は、今から来る瞬間を考えると楽しくて笑顔になっている自分に気づいた。

「あは……気持ちよくて笑っちゃう……気持ちいい時って切ない

顔するじゃない？ 普通は。今、私の顔、とろけてるんだろっうなっって思う……んっ……電マおしっこまみれになっちゃうね」

美奈も目を閉じて微笑んでいた。快樂に夢中になりそうなどころでぐっと堪えているようにも見えた。

「ふふっ……はあ……本当、気持ちいい……とろけるよね、分かる。じわじわ温かいのが出てるの分かる……。電マにおしっこ当たって変な音になってる……ビーっって」

「いいよね……ん……気持ちいい……おむつ穿いてるから、おしっこ垂れ流しても平気だし……はん……幸せ」

ホテルに向かう途中にあったドラッグストアでパンツタイプのおむつを買って、それを穿き、我慢出来ない時は中に垂れ流しちやおうという提案は、美奈のものだった。

おむつを穿く事はおろか、買った経験もなかったもので、私はズラリと商品が並ぶおむつ売り場で立ち尽くしていたのだけど、美奈はサッと店員を捕まえて、どのサイズで、容量はどんなのがあるのかをテキパキと聞き出し、買う事に決めたおむつをポンと私に手渡した。

これから穿く事になるおむつを自分で買うという事実には、私はものすごい抵抗感と羞恥心が湧いたが、レジの店員も並んでいる客も、他人が何を買ったのかなんていう事には無関心に見え、肩透かしを食らったような気分だった。

ホテルに着いてチェックインを済ませ、部屋の中でパンツを脱

いでおむつに書き替えようとした時、美奈が言った。

「おむつの中に電マ突っ込んで遊ぶから、パンツ穿いてないと思うよ？ パンツの上におむつ穿いた方がいいと思う」

「でも汚れちゃうじゃない、パンツ……」

「どうせ電マ当てたら汚れるんだから一緒にしょ？ ほらほら、言う通りにしたほうがいいよ」

結局、美奈の言うなりに、パンツの上におむつを穿いた。

「おむつってこんなに温もりがあったの……なんだか落ち着く」

「ほんとだね、寒い季節、おトイレに座るのも嫌になるけど、おむつならどこでもしていいし、癖になったりしてね、ふふ」

「美奈……そんなになりたくないよ私は……この歳で」

でも、私は、電マで好きな場所を存分に刺激しながら、我慢しきれないおしっこを好きなだけ垂れ流す気持ちよさの虜になりつつあった。

「珠里、私もういきたくなってきちゃった。全部漏れちゃいそうだし……いきながらおしっこしたい」

「はあ……美奈。そろそろいく？ おちびり止まらなくなっちゃったし、限界っぽい……」

「うんっ……一緒にいこ？ 一番強くして、訳わかんなくなっ……いっっちゃお？」

「んっ、いくう……いきしょん一緒にするう……」

ヴウウウウウウウウウウウウー……！！！！

誰からともなく電マの振動を最強にした瞬間、身体に電流が走ったように、びくんびくんと海老反りはじめてしまい、最後の時を迎えようとしていた。

「あっ……ああっ珠里っ……ひっ……いぐうっ……で、でるう……！！」

「んんっ美奈っ美奈あ……でてるう！！いつ……いつく……いく……！！」

シユイイイイイイイイイイ……

ビジュイイイイイイイイ！！！！

二人の喘ぎ声と、放尿音、電マの振動音が重なる。

おむつの中の電マにおしっこが当たり、振動音が変わって、とても淫靡な水音を含んだものになった。

「まつ……まだでてるっ……声出しオナキもち……いっつ」

「あああ……とまらないよう……おしっこ……きもちいいっ」

ワンルームマンションじゃ出せない声とおしっこを好きなだけ出して、私達は果てた。

まだ荒い息をしながら、美奈が私に話しかけてきた。

「はあ……ふう。珠里ちよっとお願ひ、煙草取ってくれる？ 私の鞆の中にあるはずだから」

「うん……。わかったけど、美奈煙草やめたって言ってなかったっけ？ ていうか最高に気持ちよかったあ……」

「こういう事のあと、お酒の席では吸いたくなっちゃうのっ！ 珠里もどう？ 一本」

「ん……。じゃあお言葉に甘えて」

美奈は長い息をついて煙を吐き出してから、買っておいたミルクティーをがぶ飲みする。

「ふはあ……。ああこの時のために生きてるって感じる……。なんか、隠し立てしないで痴態まで晒し合って二人で呆けてるって、なんか幸せ」

「分かる。軽くおちぶれていく感覚っていうのとも違うかな？ 墮落の味は蜜の味、ってね。連れがいると際限なく墮ちていきそうなのがちよつと怖いけどね。あ、ミルクティー私にも頂戴」

「どうぞ……。つと。ちよつとまつてね」

美奈はそういうと、ペットボトルを私に渡そうとするのを止めて、まだ飲もうとする。

「ちよ。何意地悪のつもり——」

私は軽く抗議しようとした所で、美奈が急に身体を寄せてくるのを見て、察した。

「んっ……。んぐ……。んっ……。ぐくっ……。ぐくっ……。はっ、はあ……。ちよつと……。美奈……。んちゅ……。んんっ……。くち……。くちゅ……。あつ、はあはあ……」

口移しでミルクティーを飲まされたからの、どさくさ紛れのキス。

彼氏にもされたことないのに。口移しだなんて……。

美奈は灰皿で煙草をもみ消し、おむつの中に手を入れてきた。おしっこまみれのおむつの中で、まだ敏感に尖っている私の核を優しく撫でる。

「あつ……。そこまだ……。だ、だめっ……。はあつ……。ああつ……」

私はたまらず声を上げる。

美奈は自分のおむつの中にも手を入れ、感じる部分を弄っているようだった。

「キス……。んっ、したことなかったね……。まだ……。あつ……。私またしたくなつて……。きちゃった」

「反則だよ……。キスは……。ともだ……。ち、でしょ……。？ はあん……。私たちは」

「はん……。ああ……。きもちい……。セフレが……。OKなら……。キス友も……。あつ、ありじゃない？」

私は腑に落ちたような気持ちになったけれど、美奈とは恋仲のような関係にはなりたくないと思っていた。でも気持ちよくて訳が分からなくなりそう。

……。まったり気分が雑談オナニーのつもりが、どうも雲行きが怪しくなってきた。

でも、美奈は私を手籠めするべく責めに転ずるのかと思いきや、私の昂つて充血している突起を撫でるのをやめて、おむつの中から手を引き抜いた。

「私は……。ん……。私ので忙しいからあ……。珠里も自分でして……。ね？ まだ飲み足りない気がする……。から……。は……。お酒、飲み

ながらあ……擦りたい」

「も……もうっ……寝た子を起こすだけ起こしておいて……それだもんな美奈は……いじわるだなあ……擦ればいいんでしょ擦ればあ……」

私も美奈に倣って、おしっこまみれのおむつの中に右手を入れて擦り始めた。パンツはおしっこと愛液で粘つき、ぐっしよりだった。私はどうせぬるぬるになってしまっているのだし、まどろっこしいなと思つて、パンツの中に手を入れて直接擦った。

「んっ……どう珠里……きもちい？　一緒に飲みながら擦る？　おむつの中に手を入れたから、開いた隙間からおしっこの匂いがむわってしちゃうね……」

「そ……んっ……そう、ね……あっ……ぐっちよぐちよだし……匂いも漂ってきちゃうからおかしくなりそ……んんっ、お酒……私も飲む……あん」

美奈はおむつの中から一旦手を出して、その手でチューハイの缶を渡そうとする。指先は糸を引き、指元までおしっこに濡れた手で。私もおしっこのついた手で思わず受け取る。缶を受け取った時お互いの指が触れ、その感覚に集中するあまり缶を取り落としてしまいそうになる。缶自体もおしっこと愛液が付着している、油断するとぬるっと滑ってしまいそう。

「くさかったら……ごめんね、珠里。こんなにとろとろだよ……」
親指と人差し指をにちゃにちゃとしてから、美奈はその指を私の口に入れようとしてくる。

「珠里……ふふ……めっちゃ濡れてるでしょ？　おしっこの匂い

もするし……どう？　お味のほうは……」

さつき口移しでミルクティーを飲んだし、私は大した抵抗もなく、その指を口に受け入れ、感想を言った。

「えぐみがあつて塩っ辛いね……それに酸っぱさもあつて、独特な味……。美奈も……舐めてみる？」

私はおすおす指を差し出し、美奈の口元に近づける。彼女は軽く口づけをしてから、私の指を男性のシンボルに見立てたように、根元から舐め上げ、指の根本まで深くくわえ込み、舌をなまめかしく動かし、私のおしっこと愛液の味と確かめているようだった。

「珠里のは、ちよつと味がきつめに感じた……おしっこ濃かったのかな、酸っぱい感じはあまりない……つていうか、おしっこの味とか初めてだよ……」

美奈に再び火を付けられ、切ない場所の疼きを鎮めるべく擦りながら、渡されたお酒を飲む。喉が渴いていたのか美味い。

「男の人が、……んっ、クンニするるときって、こんなの舐めてるんだね……シャワーも浴びずに……あ、襲われちゃった時とか、おしっこの匂いも……きついんだろうね」

美奈の指も定位置に戻って擦り上げる作業に勤しんでいるようだった。

「シャワーを使わず、ん……そのまま前戯に持ち込みたがる人って……あつ。こういう味とか、一日洗わなかった股間から……漂ってくるおしっこの匂いが……はあ……好きなかもね……」

「あゝきもちい……クリ擦ってるせいもあるけど、おむつに……」

おしっこ出し慣れてなかったから、んんっまだ残ってるみたい……」

「私も。きゅんきゅん中が締まるし、ぬるりと撫でた時に……おしっこしたさが……はん……ツーンときちやう」

「美奈、おむつ……穿いてるし、出していい？ 出しながら擦るのやみつきに……な、なっちやったか……も」

「ずるい……あ、んん……私も出そうかな……一緒に出そうね……珠里……」

友 私は秘芯をやさしく撫でながら、身体をリラックスさせていった。おしっこが徐々に通り道に流れ込んできて、出口に到達する。膀胱も緩やかに収縮を始め、むずむずとした尿意が徐々に強くなつた。

ナ 美奈は目を閉じ身体力を抜いて、尿道を通過する液体に精神を集中させながら、股間をまさぐっているように見えた。

オ おしっこが出口まで来て、あとは閥門を開くだけになった私は、筋肉を弛緩させて……。

「ん……出すよ美奈……おしっこ出すね……」

シヨ、シヨワアアアアアアア……

ジヨツ……ジヨツジヨツジヨツジヨツ……

素直に出ているのは私の音……。

クリトリスをこしこし擦りながら放尿しているのか、リズムカ
ルな音は美奈……。

「はあ……珠里……出てる、こねくり回しているから……ぐっちよぐっちよいつてる……いい音してる……」

「まだ出る……結構……たまつたのかな……クリ擦りとまんないよね……おむつに……出すといやらしい音するね……」

美奈は恍惚とした表情のまま、括約筋を締めようともしていない様子で話し出す。

「あ、変なところあつたかくなってきた……お尻というか太ももが温かい……」

「あーあ、座って……たくさん出しちゃったから……おむつの横からおしっこ漏れちゃってる……」

「あら……でも……そんなの気にせず全部だしちゃお……すぐに乾いちやうって」

「そだね……止めるなんて勿体ない気分……ホテルって乾燥してるし……すぐ乾くよね」

私たちはおむつは脱いだけれど、下に穿いていたパンツは脱がず、相も変わらず自慰に耽っていた。

だんだんアンモニア臭を放つようになり始めたパンツのおしっここの匂いを評論してみたり、だいぶ前にしていた茶葉の話題に戻ってきたりして、お酒をちびちび飲みつつ、フリータイムいっぱいまでのんべんだらりと自慰と雑談をして過ごした。